

道徳通信かがわ

第26号

平成29年11月24日（金）

香川県教育委員会事務局

義務教育課

2001年、秋田県のある小学校で、子どもたちが育てたニワトリを近くの農業高校で解体、それをカレーとして調理して食べるという授業が計画されていました。「食と命の大切さを伝えたい」という担任の思いがありましたが、解体、調理を目前に、その授業は中止となりました。「食肉資材として育てられた動物を解体することと、子どもたちが愛情を込めて飼育してきたニワトリを殺すことを同じにはいけない」、中止の背景には、そのような理由があったそうです。

11月15日、三豊市立高瀬中学校の総合授業リーダー・松村仁美先生の公開授業を参観し、15年以上前の、この出来事を思い出しました。

多面的・多角的に考えるとは —総合授業リーダー公開授業—

この授業は、「いのちをいただく」という資料を用いての授業でした。その資料は、およそ次のような内容でした。

食肉加工センターに勤める坂本さんは、食肉加工の運命にある牛と、その牛を育ててきた畜産農家の女の子の最後の別れの場面を目にします。女の子のおじいさんは、「坂本さん、みいちゃん（※牛のこと）は、この子と一緒に育ちました。だけん、ずっと、うちに置いとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんと、この子にお年玉も、クリスマスプレゼントも買ってやれんとです。明日は、どうぞ、よろしくお願いします。」とお願いをします。しかし、女の子の、みいちゃんへの思いを知ってしまった坂本さんは、「この牛を殺すことは自分にはできない。」と、仕事を休もうとします。

そんな坂本さんに、息子のしのぶ君が言います。

「お父さん、やっぱりお父さんがしてやった方がよかよ。心の無か人がしたら、牛が苦しむけん。」

翌日、坂本さんは、みいちゃんに「ごめんよう。みいちゃんが肉にならんと、みんなが困るけん。ごめんよう。」と語りかけながら、みいちゃんを殺めるのでした。

この資料は、松村先生が、たかせ人権福祉センターの方と協力しながら教材研究し、作り上げたものでした。教師の思いを込めた教材は、子どもの心にも強く響きます。

授業の導入で、食肉加工の様子を初めて目にした生徒たちは、「かわいそう」などと言葉をもらっていましたが、教師が紙芝居で語る「いのちをいただく」を見ながら、生徒はしだいに紙芝居の世界に入っていました。そして、生徒は語り始めます。

「自分たちが普段食べている牛だけじゃなく、豚なども、同じことかもしれない。」

「みいちゃんだけじゃなく、他の牛もだれかにかわいがられていたかもしれない。」

「多面的・多角的に考える」とはこういうことなのでしょう。

「食肉加工業者は、仕事として動物を殺しているから、解体することに抵抗はない」。冒頭の秋田県の事例から描いていたこの考えは、一面的だと思われ知らされました。

食肉加工を仕事とする人の背景にも、その家族や、牛を育ててきた人の思い、そしてその命を奪うことへのためらいがある、その気持ちが切ないほど伝わってくる授業でした。



【紙芝居を食い入るように見る生徒たち】